

---

**資 料**


---

## 本学教育課程における「看護実践論科目」の運用と課題 —看護過程の教材として「睨ファミリー」を用いて—

The Process of making NAWATE-family, methods and challenges  
in Shijonawate-gakuen University's nursing curriculum

安森由美<sup>1)</sup>

Yumi Yasumori<sup>1)</sup>

### 抄 録

本稿は、平成 27 年に開設された四條畷学園大学看護学部の特徴として掲げた「看護実践論科目」の具体的な運用内容である。各専門科目分野から教員を招集し、会議を重ね、模擬家族（4 世代）の「睨ファミリー」を作成した。その模擬家族で看護過程を展開し、それに伴う看護技術演習を実施できるよう各領域が専門性を活かしながら、看護の共通性を網羅できるような教材を作成した。

特徴的な点は「睨ファミリー」という同一事例家族を用いることにより、看護学における各専門領域の横断的つながりを意識できること、本学部の特色である在宅を見据えた生活者の視点を広げることに繋がる。また、対象者の個別性を考慮した、より具体的な看護計画の立案、ケアの提供ができるような演習内容となると考えた。

キーワード：看護過程、模擬事例、睨ファミリー、教材

### I. はじめに

看護基礎教育のカリキュラムは、人間の生涯発達が重要な基軸となっている小児看護学、成人看護学、老年看護学などの「ライフステージ」別科目、母性看護学、精神看護学、在宅看護学などの全ての「ライフステージ」を網羅している科目が整えられている。

平成 27 年に開設された四條畷学園大学看護学部（以下、本学部）は、学部申請時に教育課程編成の特徴として、看護専門職としての実践力を獲得するために必要な看護過程について、各専門領域に概論・方法論に続く演習科目として看護実践論（45 時間）を配置した。そして、看護実践論は、「ライフステージ」と共に人が生から死へと向かう「ラ

イフサイクル」に着目し、対象を個人としてだけでなく家族の一員と捉え、生活者としての視点を深める。また、家族の役割や機能、家族ダイナミクス等の家族発達の視点を持つことで在宅を見据えた生活者の視点を広げ、対象者を全人的に理解することを目的とした。

具体的に、模擬家族（4 世代）の「睨ファミリー」を作成し、その模擬家族で看護過程を展開し、それに伴う看護技術演習を実施する。その上で各領域が専門性を活かしながら、看護の共通性を網羅できるような教材を作成した。

本稿は、その教材作成の目的と作成経過および運用、平成 29 年 3 年次前期に実施した 6 領域を終えての途中経過のまとめとする。

---

<sup>1)</sup> 前 四條畷学園大学看護学部 Faculty of Nursing, Shijonawate Gakuen University

## Ⅱ. 本学カリキュラム（看護実践論）の特徴と目的

本学では、看護師国家試験受験資格のみに特化した教育課程を作成した。それは医療の高度化や看護師の活動の場の多様化等により、学修すべき内容の質的および量的な増大に伴い、社会的に看護師のみの教育課程の推進が叫ばれているからである。また、年々高齢化が進み、一人暮らしや高齢者のみ世帯が増加する一方で、医療施設における在院日数が短縮し在宅での療養者が増加している状況を鑑み、看護の観点も家で暮らすことを視座に入れる必要があり、在宅での生活に焦点をあて講義内容を充実させたからである。そして、1年次から4年次までのそれぞれに、体験型・実践型学習を取り入れた学生の理解が深まる学習サイクルを導入した。

看護学部のディプロマポリシーの「4. 人々の生活の質（QOL）の向上を目指し、対象に合わせて看護実践する能力を身に着けている」「5. 様々な療養の場で生活する人々とその家族のニーズを理解し、必要に応じた看護を実践する能力を身につけている」について、看護専門職としての実践力を獲得するために必要な看護過程については、演習科目として看護援助論や看護学方法論の他に、看護実践論を開講した。実際には看護実践基礎論を2年次後期に位置し、3年次前期で6領域の看護学実践論（小児・成人Ⅰ・成人Ⅱ・老年・母性・精神）を、そして4年次前期に在宅看護学実践論を配した。また、一つの模擬家族を事例として家族が成長する過程で生じる様々な看護を、演習を通して各専門領域（基礎、小児、成人、老年、母性、精神、在宅看護学領域）で学ぶようにした。

特徴的な点は「啜ファミリー」という同一事例家族を用いることにより、看護学における各専門領域の横断的つながりを意識できることをねらいとしている。具体的には、想定した模擬家族（4世代）の「啜ファミリー」を、各専門領域が家族発達の視点を含めて対象となる家族員の看護過程を展開するものである。家族発達理論は、家族そのものの発達、成長ととらえ、その家族員はそれぞれの異なる世代、性別、発達課題を持ち合わせている。そして家族を一つの単位としてとらえるが、ここでは主人公の個の看護過程を考えるため、

あえて家族発達とした。この家族発達の視点が、本学部の特色である在宅を見据えた生活者の視点を広げることに繋がり、対象者の個別性を考慮した、より具体的な看護計画の立案、ケアの提供ができるような演習内容となるため、応用力も培われることになると考えた。

## Ⅲ. 実践論ワーキング

実際の授業内容および構成について調整するために各専門領域から1名の教員を選出し、月1回の割合（平成27年6月～平成27年12月）で6回会議がなされた。そこで以下のことが話し合われた。

- 1 演習科目として授業および演習の割合と進行時期
- 2 アセスメントの枠組みの確認
- 3 「啜ファミリー」の家族構成、家族の変容にあわせた展開図の作成
- 4 学生への掲示方法
- 5 振り返りの内容

### 1 演習科目として授業内容および演習の割合と進行時期

各科目の教育内容は表1のとおりである。

話し合いの結果、看護実践基礎論1単位30時間（2年）については、看護過程の基礎になるため、事例を展開することが難しいこと、この時点での「啜ファミリー」の全体像を説明するには、学生のレディネスを考えると無理があることを考慮し啜家の構成員からはずした。また、3年前期の実践論は、「啜ファミリー」の事例を用いた看護過程の展開と看護技術で構成し、この配分は各領域に一任した。しかし、授業進行する上で、看護過程が重複にならないように時間割を工夫することとした。その内容が図1である。

### 2 アセスメントの枠組みの確認

アセスメントの枠組みについて、共通した枠組みの使用について話し合いがなされた。臨床で用いられている枠組みを使用する方が臨地実習で戸惑わない、専門性があるので1つの枠組みに絞るのは困難などの意見が出された。本学の実習施設

表1 各実践論の教育内容

学年	科目名	単位	時間	内容(平成29年シラバスより抜粋)
2	看護実践基礎論	1	30	看護実践基礎論は、各看護学実践論の基本となる思考過程を学ぶ科目である。模擬家族「睨ファミリー」を家族発達の視点からとらえ、家族員の看護過程を展開する。
3	成人看護学実践論Ⅰ	1	45	慢性の健康障害を有する対象者とその家族の特徴を理解し、慢性の各期(局面)に応じて変化する看護を学ぶ。病と共に生活する人が直面する困難(問題)を理解し、長期にわたり治療を受ける人を支援する看護について理解を深める。「睨ファミリー」の父親を通して、ライフサイクルの成人期にある対象者の健康障害が社会生活に及ぼす影響を理解し生活の再構築への具体的なプロセスを学ぶ。さらに看護問題を解決するために必要な援助について、ロールプレイを通して実践・評価する。
	成人看護学実践論Ⅱ	1	45	急性期・周術期(術前・術中・術後)にある対象者の身体的・心理的・社会的特徴を理解し、看護の必要性について理解を深める。成人期にある人が健康障害をきたした時の看護援助について概説する。さらに、模擬家族「睨ファミリー」の母親を事例とし、周術期の過程を通して、看護実践の具体的な方法が考察し、実践することができるように学修する。
	老年看護学実践論	1	45	高齢者がその家族とともに最期までどう生き抜くのか、その終焉までの具体的な体験や事例に基づき、根拠を踏まえた看護過程の展開により、老年看護に求められる能力を養うことを目指した内容とする。また、自らの老人観を意識化する機会とする。加齢や疾病による生活への影響や終焉までの具体的な体験や睨ファミリーの事例を通し、倫理的配慮に基づいた高齢者とその家族が望む生活を目指した看護計画を展開する内容とする。
	母性看護学実践論	1	45	母性看護学概論および母性看護学方法論で学習したことを基盤に、模擬家族『事例』(睨家の長女夫婦)の妊娠・出産・子育てに対する看護の展開ならびに必要な看護技術を学習する。
	小児看護学実践論	1	45	模擬家族「睨ファミリー」の事例を用いアセスメントを行い、疾患と成長発達に及ぼす影響について個別的な看護を教授する。 ・事例を用いて、子どもの発達段階に応じたコミュニケーション技術、小児特有の看護技術について、ロールプレイを通して教授する。
	精神看護学実践論	1	45	看護実践基礎論の事例「睨ファミリー」の長男と叔父に対しての看護展開について学習する。精神疾患を患う人の看護において、病期における特徴的な臨床事例を通してセルフケアモデルに基づく看護展開の方法について学ぶ。
4	在宅看護学実践論	1	45	多様化する地域・在宅での生活において、療養者とその家族を支えるために必要な知識と技術を講義・演習を通して修得する。また、在宅看護過程の特徴を理解し、「睨ファミリー」を用いて看護過程の展開を行い、多職種による援助の実際を創造する。

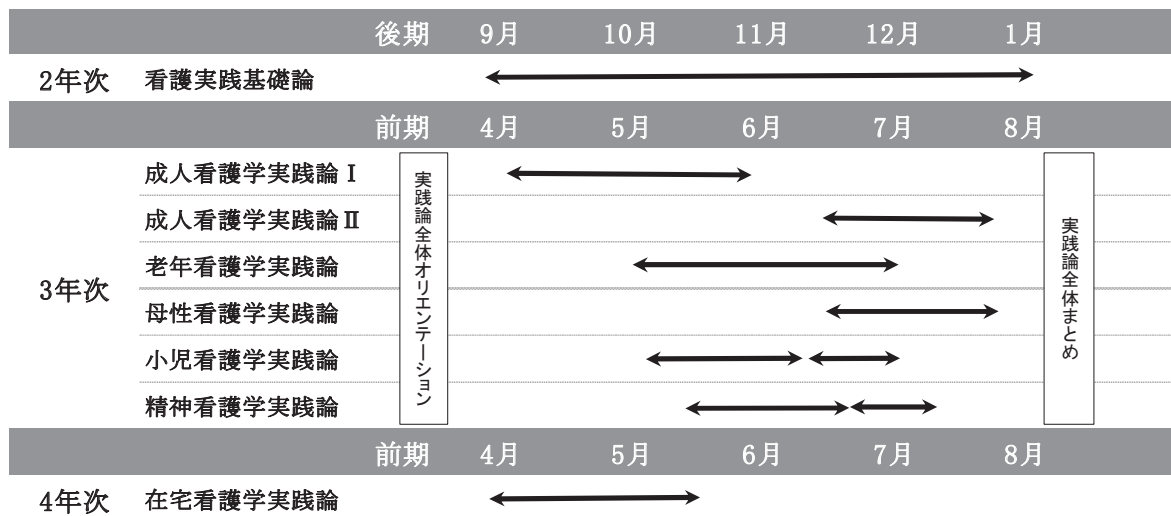


図1 看護実践論の年間の流れと看護過程展開の時間配分

が多岐にわたるため、一か所の臨床に合わせるのは困難と考え、専門性を尊重し、共通した枠組みを決めず、あくまで看護過程（アセスメント→計画→実施→評価）の思考過程を重視して学生に提示することとした。

### 3 「睨ファミリー」の家族構成、家族の変容にあわせた展開図の作成

領域から使用する疾患とその病期の看護について報告があり、それに基づいて家族構成が図2で示された。「睨ファミリー」は各領域が睨家、飯盛家、大東家の3つの家族の形態にあわせて看護過程を展開するため、年代、その時の家族構成、生育歴、氏名などを摺り合わせた。またその内容が一見してわかるような家族構成の経過図（図3）も作成した。

そこで、家族の時間軸は、年代、生育歴から考えるとまちまちになるが、現在の法律や社会資源を利用した看護を展開させることにした。

### 4 学生への揭示方法

領域の専門性と共通性を網羅した冊子（図4）を作成した。また、3年次の前期オリエンテーション期間に、学年全体に対して、共通冊子を配布しながら、「睨ファミリー」を用いての実践論の意図と目的を説明した。学生向けに「睨ファミリー」から学ぶ看護の展開と名づけ、より身近に感じら

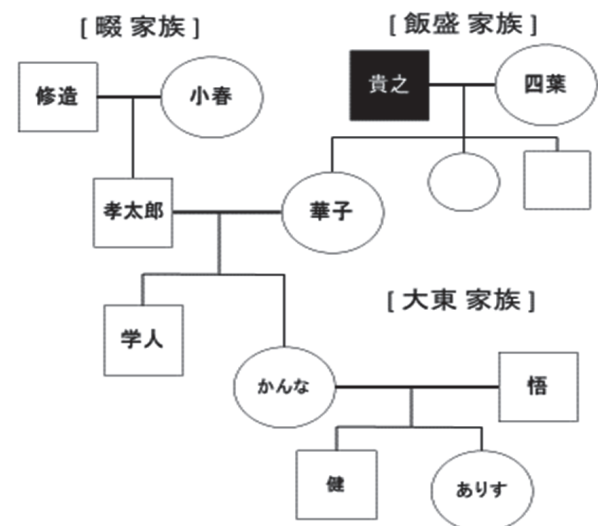
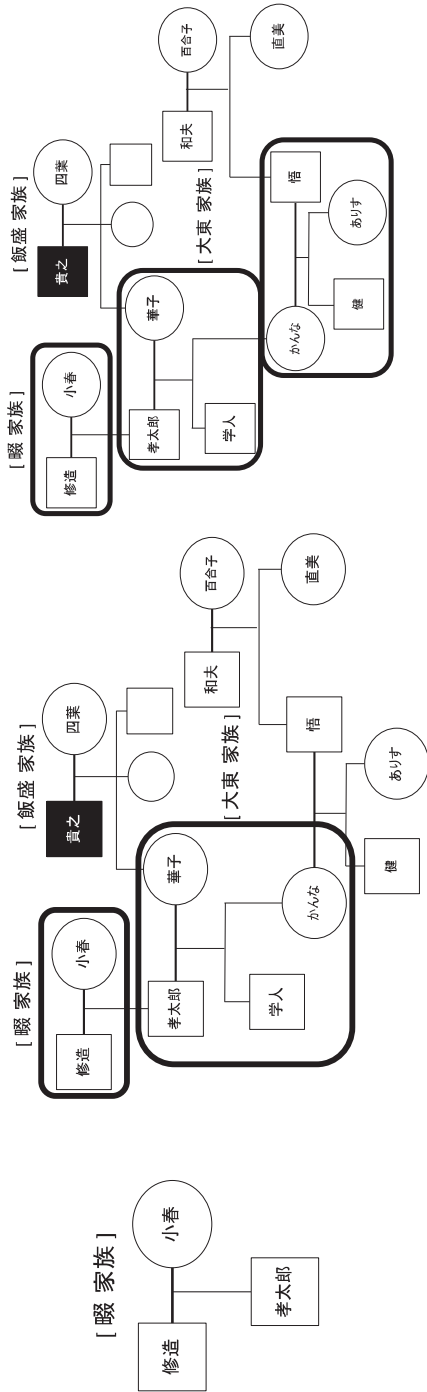


図2 家族構成

れるようにした。6領域の振り返りとして、同様に前期の終わりに学生の理解度を確認した。在宅看護学実践論については、次年度の前期の説明になると付け加えた。

### 5 振り返りの内容

実践論の振り返りとして、3年次の6領域の看護過程を展開するにあたり、看護問題の共通点と相違点、「睨ファミリー」の一員としての生活者の視点の2点に焦点をあて、学年全体としてグループワークをおこなった。各領域の教員も参観しながらの授業を行った。



暇 孝太郎 一人息子	国立大学毕业 公立高校教諭(社会)	29歳 華子と結婚 30歳 長男学人誕生	33歳 長女かなな誕生 45歳 総務部長	55歳 糖尿病	60歳 定年退職後、予備校講師に再就職
暇 華子(旧姓 飯盛) 3人兄弟 長子	地元の大学毕业 中小企業の事務職	29歳 孝太郎と結婚 30歳 第1子学人出生 33歳 第2子かなな出生	47歳 胃がん手術 高校卒業後、進学せず	20歳 統合失調症 初回入院	入退院を繰り返す(3回) 42歳 統合失調症再発 再入院
暇 学人 (孝太郎長姉の長男)		誕生(孝太郎, 華子30歳)			34歳 第2子 ありす出生
暇 かなな (孝太郎夫婦の長女) 結婚後、大東に改姓		誕生(孝太郎, 華子33歳)	22歳 大学卒業後IT企業に就職	28歳 第1子 健出生	
大東 悟(さとる) (かななの夫)			大学卒業後、IT企業勤務	28歳 かななと結婚 29歳 第1子 健誕生	34歳 第2子 ありす誕生
大東 ありす (かなな長姉の長女)					3歳ごろから慢性気管支炎 6歳 気管支喘息 内服治療中 フアロー四徴症 生後まもなくシャント術
暇 修造(孝太郎の父) 会社員(営業)			64歳パーキンソン病発症	76歳パーキンソン病悪化 入院	
暇 小春(孝太郎の母) 専業主婦			73歳 ストマ造設		
飯盛 貴之(華子の父) 会社員		47歳 就業中の事故死 (華子20歳)			
飯盛 四葉(華子の母) 専業主婦		24歳 華子出生	居間で転倒・大腿骨折、退院後、長男家族と同居	77歳 死去	

図3 家族構成の経過図

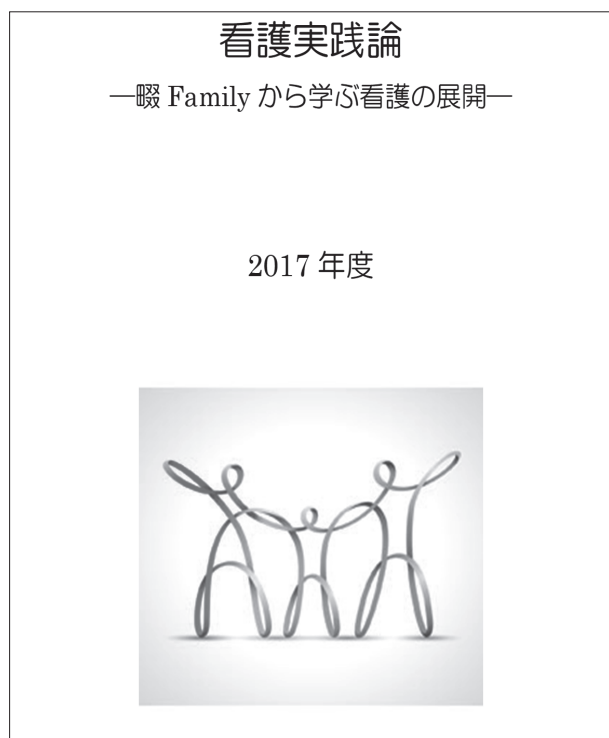


図4 実践論冊子表紙

## 6 学生の「啜ファミリー」の振り返り

グループワーク後、学生に「啜ファミリーを用いての対象理解について印象に残ったこと」「在宅看護論にどのようにつなげるか」「実践論について考慮してほしいこと」の3点について授業終了時のコメントを提出してもらった。その内容を教員間で回覧し共有した。

学生は、看護過程の難しさ、情報収集の大切さ、個別性のある看護計画の重要性等が理解でき、また「啜ファミリー」にすることで、対象が個人だけでなく家族についても援助が必要であることを理解していた。また、入院中や退院しての患者の生活を考慮して、計画を立てることが重要とも気づいている。「個人を見ただけでは理解がむづかしいが、ファミリーとして考えると対象理解しやすい」「生活者として何を一番大切に思っているか、家族と患者がどのようなかかわりを持っているかということが重要」などの感想が聞かれた。また、「その時々家族体制、患者の受け止め方などを理解して家族支援を考える大切さがわかった」などの感想もあった。

対象者の背景や生きてきた過程を含めた生活者への理解、ライフヒストリーを知ることで対象の

理解が深まり、アセスメントの視野も広がっていた。すべての領域が、退院を踏まえた援助が必要であるため、在宅療養への移行に向けた看護が重要であると理解出来ていた。また、その時の社会資源の活用を考えるきっかけになっていた。

しかし、複数の事例が授業ごとに出てくるので混乱したとの意見もあった。提出レポートの違いもあり、書き方が混乱したとの意見も出た。また、対象の理解では、情報をしっかり把握、吟味し具体的にアセスメントし、看護計画に反映させることが未熟であり、学生への教授方法の難しさも浮き彫りにされた。

## IV. 今後の課題

一般的に看護過程の学習は、学生がこれまで学習してきた解剖・生理学や病態学、生活援助技術の知識を統合させ、一人の人間の身体の中で起こっていることをイメージすることが難しく、また、自己認識や自己概念などのアセスメントの解釈・分析が幾通りにも考えられるため、自分の分析に自信が持てないなどの難易度の高い学習となっている。

本学の看護実践論は一つの模擬家族「啜ファミリー」を事例として扱い、主役とその家族を生活者として、家族構成の変化による役割の変化など複雑に絡み合う人生を描くことができるようになっている。学生はそのような世界を生活している対象者を理解し計画を立て看護することになる。単位を個人から一家族に広げることで、複雑ではあるが、その人の生きてきた背景を知ることができ、より価値観や役割をイメージしやすくしたと考えている。しかし、前述したように、既習の知識の定着、活用といった基本的な学習に戸惑っている学生も多いため、看護学実践論のほかの時間をも含めた知識定着の確認等の教授法も吟味していくことが必要であろう。また、本稿は開設時のカリキュラムの立案に主に主眼を置き、3年次の前期でのまとめであるため、4年次前期の在宅看護実践論受講後のまとめとなっていない。在宅を見据えた生活者としてのとらえ方について、重要性は理解できていても、どこまで既知の知識として運用できるか、視野が広がっているか等、より具体的な吟味が必要と考える。

教材については毎年、領域ごとにシナリオの修正を行っている。そのため、実践論ワーキングを招集しこれまでの実践論の総評価、見直しも必要と考える。

**謝辞** この「畷ファミリー」作成に当たっては、各領域から選出された教員の功績が大きく、改めて感謝申し上げます。

### 参考文献・参考資料

- 1) 四條畷学園大学看護学部認可申請書 【資料】  
設置の趣旨等を記載した書類. 四條畷学園大学看護学部事務室所蔵
- 2) 2021年度 看護学部看護学科学生便覧 四條畷学園大学
- 3) 四條畷学園大学 看護学部シラバス(2017年)  
四條畷学園大学 UNIVERSAL PASSPOT
- 4) 河原宣子、相羽利昭：新カリキュラムから生まれた大学4年間を通して学ぶシナリオ教材—京都橋大学「橋薫の一生」—, 看護教育, 50(12);1096-1101, 2009.